

マレーシア語の TER- 受身構文に見られる間接受身性

—日本語との対照を通して—

Leow Yoon Chin

(2001年9月30日受理)

The Indirect Passive Features in the "TER-" Passive in Bahasa Malaysia
-Through The Contrastive Study with Japanese Language-

Leow Yoon Chin

The "ke- -an" passive in Bahasa Malaysia is said to have similar semantic features as the Indirect Passive in the Japanese Language (Indirect Passive is a passive sentence which does not have a corresponding active sentence and expresses adversative meaning encountered by the subject=experiencer). However some Indirect Passive sentences are expressed with the "ter-" passive, meaning that the "ter-" passive also has similarity with the Indirect Passive. This paper examines the features of the "ter-" passive by using concrete examples and points out that both "ter-" and "ke- -an" passives express adversative influence. However, the "ter-" passive only corresponds with the Indirect Passive semantically, but not in the morphological and syntactical aspects. This paper concludes that in Bahasa Malaysia, there are two passive expressions to express the adversative meaning found in the Indirect Passive. In addition, it is found that the "ter-" passive not only has the features of the Indirect Passive, but also has the 'accidental' meaning as in the Japanese TE-SHIMAU expression. Finally, the interesting and significant finding of this paper is that both Japanese Language and Bahasa Malaysia have different expressions for sentences with and without adversative meaning.

Keywords: Ter- passive Non-volitionality Adversative Intention Responsibility

キーワード: Ter- 受身構文 非意図性 被害の意味 意図性 被動者の責任

0. はじめに

日本語の間接受身に対応するものとして、マレーシア語(及びインドネシア語¹⁾)では ke- -an 構文だけでなく、ter-構文も意味的関連があることを示唆している論文がある(松岡 1995, 湯浅 2000)。しかし、両者がどのような点で対応し、どの点で異なるのかについては明らかにされていない。本稿では具体的な例文を用い

て、ter-構文と間接受身との関連を検証していくことを目的とする。

1. 問題の所在

Soenjono Dardjowidjojo (1983a)では、主語がある望ましくない事態から被害を受ける場合、その事態は ke- -an 構文で表現すると述べられている。

(1) *Dia kehujanan.* 彼は雨に降られた。

次の文では、子供がうっかり kapok(木綿)を食べてしまって被害を受けたことを表しているが、この場合(2)の ke- -an 構文ではなく、(3)の ter- 構文が使われる。

(2) * *Dia kemakanan kapok.*

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：多和田眞一郎(主任指導教官)、沼本克明、
町博光、酒井弘

彼は ke- 食べる -an 木綿

(3) (Segumpal) kapok termakan dia.

(一塊の)木綿は彼に食べられた。

このことについて、Soenjono Dardjowidjojo(1983a)は次のように説明している。「同じ意味を持つ *kemakanan と termakan という単語が二つある場合は、どちらか一方の語は存在しないと考えられる (Adanya dua kata *kemakanan dan termakan dengan arti yang sama barangkali merupakan kemewahan bahasa (redundancy))(p300)。」*kemakanan と termakan は共に makan「食べる」という動詞にそれぞれ ke- -an 共接辞と ter- 接頭辞をつけた述語動詞である。上の説明によると、ter- 述語動詞は ke- -an 述語動詞と同じ意味を持っており、ter- 述語動詞と ke- -an 述語動詞は同時に存在することはなく、どちらかしか存在しないことになる。この場合は kemakanan が冗語であること、また ter- 構文は ke- -an 構文と同じように被害の意味を表わす機能²があることが示唆されている。

これまでの研究では、日本語の間接受身に類似するマレーシア語(及びインドネシア語)の構文として、ke- -an 構文があげられることが多い(Kanou 1982, 松岡 1990, 森村 1992, Leow 1999・2000 等)。しかし、両言語の文法構造の違いにより間接受身は ke- -an 構文と完全には一致していないという結論が出ている。Soenjono Dardjowidjojo(1983a)の記述では、間接受身には ke- -an 構文と ter- 構文が相補的に用いられると考えられているが、両者の違いについては述べられていない。

本研究ではまず ter- 構文と ke- -an 構文との関連を調べ、ter- 構文の意味構造上の特徴を明らかにする。そして最終的には日本語の間接受身との対応性を探ることを目的とする。

2. 先行研究

A. マレーシア語の ter- 構文と ke- -an 構文

ter- 接頭辞と ke- -an 共接辞は動詞・形容詞・名詞と連結してさまざまな意味を持つ派生動詞を作り、ter- 構文と ke- -an 構文で用いられる。それぞれの構文は次のような意味を持つ。

ter- 構文

a. 非意図性*

i. Bapa terambil buku saya.

〈父がうっかり私の本を持っていった。〉【能動態】

ii. Buku saya terambil oleh bapa.

〈私の本が父に持っていかれた。〉【受動態】

b. 可能

i. Badang terangkat batu besar itu.

〈バダンはその大きな石を持ち上げた。〉【能動文】

ii. Batu besar itu terangkat oleh Badang.

〈その大きな石がバダンに持ち上げられた。〉【受動文】

c. 完了

Pintu rumahnya terkunci.

〈彼の家のドアは鍵がかかっている。〉

d. 最上限

Siti murid yang terpandai.

〈シティは一番賢い学生だ。〉

e. 突然の動作

Dia senyum.

Dia tersenyum.

〈彼女が微笑んだ。〉 〈彼女が急に微笑みだした。〉

f. 形容*

Lukanya tertulang.

〈彼の傷はとても痛いようだ。〉

(tertulang = 骨まで痛い)

ke- -an 構文

a. 具体物による被害*

Kami kehujan di jalan.

〈私達は途中で雨に降られた。〉

b. 可能

Koyak seluarnya kelihatan.

〈彼のズボンが破れているのが見えた。〉

c. 非意図性*

Seluarnya kebasahan air kopi.

〈彼のズボンはコーヒーで濡れてしまった。〉

d. 動作による被害*

Dia kehilangan wang.

〈彼はお金をなくしてしまった。〉

(Lufti Abas 1988)

マレーシア語の ter- 構文には能動文と受身文を作る機能がある。本研究で扱う ter- 構文は、上述の a.ii. の〈非意図性〉の意味を担う受身構文である。ke- -an 構文については a と c と d が研究の対象となる。

John V. Wolff, et al(1987)は ter- 構文と ke- -an 構文を別々に取り上げ、それぞれの構文の意味について説明し、一部の動詞において、同じ意味を表わす文では ter- 構文の方が標準語で、ke- -an 構文は方言的な言い方であるという違いがあると述べている³。すなわち、両構文は同じ意味を表わすことがあると考えられる。

Lufti Abas(1988)では ter- 構文と ke- -an 構文の意味が詳しく論じられている。ter- 構文は上述の a~f の意味を表し、ke- -an 構文には a~d の意味があると言われている。そのうち、* のついた a と f の ter- 構文と、ke- -an 構文の a と c と d は、もとの意味に加え〈非意図性〉の意味も同時に持つものとして、同じグループにまとめられている。この記述から、〈被害〉と〈非意図

性)には何らかの関係があると考えられる。

ルシアナワティ(1998)では、ter-構文は<不作為>、<完了>と<可能>の意味を表わすと述べられている。<不作為>の意味を表わす ter-構文は対応する能動文が meN-構文であるが、「tidak sengaja(わざとでない)」という言葉を入れて<非意図性>の意味を示さなければならぬとする。また、故意にするつもりではないが、そのことが起こってしまったという<完了>の意味にも関連しているという説明も加えられている。そして、<不作為>と<完了>の意味を持つ ter-構文は日本語の「～てしまう」の特性に似ており、「誰かによって無関係に、無意識的にある出来事がいつの間にか起こったということは、『そのことが起こって、もはや元の状態に戻れない』という心理も含んでいる」(p99)という。

湯浅(2000)は、ke- -an 構文は日本語の「第三者の受身」と形態的・統語的・意味的共通性を持っているとする。ter-構文については動作主の非意図性を示す受身の用法があるという。両構文の共通点として「受動態の主語の関与し得ないある<行為>や<現象>や<状態>等があり、それにより受動態の主語が何らかの影響を負う」という意味構造があげられている。しかし、形態的・構文的観点からの考察はなされていない。

ter-構文が被害の意味を表わすことを述べた研究は筆者の知る限りでは皆無である。しかし Soenjono Dardjowidjojo(1983a), John V.Wolff, et al(1987)と Lufti Abas(1988)などの研究は、ke- -an 構文と ter-構文の意味的関連を示唆している。どの研究でも、両構文が直接的に関連していると詳しくは論じられていないが、<非意図性>と<被害>には何らかの関係があることは否定できないと思われる。

B. 日本語の間接受身

ここでは、「持ち主の受身」と「第三者の受身」をまとめて「間接受身」と称する。

間接受身は、もともと係わりのないもの、あるいは間接的なものを受身という形を使って係わらせる働きを持っている。そして、意味の面から見ると能動文においては被害の意が感じられないのに、受身文にすることによって新たに被害の意味がでると述べられている(田中・舘岡 1992, 山田 1996)。

森村(1992)は「第三者の受身」の特徴を次のように詳しく述べている。

「主語の位置に立つものが『人または人に準ずるもの』である。(中略)或る独立した事象が起きるが、主語の位置に立つものはその事象の生起とは別個に『第三者』としての立場にある。従って、述語動詞の表す動作に関しては、主語の位置に立つものを直接対象とし

てその対象に動作を向けられるものではなく、また、主語の位置に立つものを直接の相手として動作が行われるものではない。主語の位置に立つものとは別個に或る事象が独立して起きるが、それによって主語の位置に立つものが『利害』を受ける。この「利害」とは多くの場合、『被害』を表す。」(p23)

以上の記述に基づいてマレーシア語における ter-構文の特徴をとらえ、間接受身表現との対応性を探ってみる。

3. マレーシア語の ter-構文の意味構造

マレーシア語における ter-構文の意味構造を例文(4)～(11)を通して検証する。(a.はter-構文, b.は能動文「動作主+ tidak sengaja+meN-他動詞+対象」である。(10)～(11)の[]内は意識で、△は持ち主を表わす。)

- (4) a. Askar itu **tertembak** oleh kawannya. (HM)

その兵士は仲間に撃たれた。

- b. Kawan askar itu tidak sengaja menembaknya.

その兵士の仲間は彼を撃ってしまった。

- (5) a. Anak kucing itu **terpijak** oleh Ali.

その子猫はアリに踏まれた。

- b. Ali tidak sengaja memijak anak kucing itu. (KC)

アリはその子猫を踏んでしまった。

- (6) a. Kopi saya **terminum** oleh adik. (KC)

私のコーヒーは弟に飲まれた。

- b. Adik tidak sengaja meminum kopi saya.

弟は私のコーヒーを飲んでしまった。

- (7) a. Kaki saya **tersepak** oleh Ahmad. (AHM)

私の足はアマットに蹴られた。

- b. Ahmad tidak sengaja menyepak kaki saya.

アマットは私の足を蹴ってしまった。

- (8) a. Surat itu **terbakar** oleh Ali. (SD)

△の手紙はアリに燃やされた。

- b. Ali tidak sengaja membakar surat itu.

アリは△の手紙を燃やしてしまった。

- (9) a. Bahan bacaan itu **terbuang** oleh Ali. (SD)

△の資料はアリに捨てられた。

- b. Ali tidak sengaja membuang bahan bacaan itu.

アリは△の資料を捨ててしまった。

- (10) a. Batu itu **tersepak** oleh dia. (KC)

その石は彼に蹴られた。

[彼はその石を蹴ってしまった。]

- b. Dia tidak sengaja menyepak batu itu.

彼はその石を蹴ってしまった。

- (11) a. Racun itu **termakan** oleh anaknya. (KC)

その毒は彼女の息子に飲まれた。

[彼女の息子はその毒を飲んでしまった。]

b. *Anaknya tidak sengaja memakan racun itu*

彼女の息子はその毒を飲んでしまった。

これらの文の能動文は、動作主が被動者に対して非意図的に動作を行ったことを表している。この場合、被動者に被害の意味は顕著に表れてはいないが、受身の *ter*-構文にすることによって、次のような被害の意味が顕在化する。

(4)・(5)……b.の能動文は、動作主が「*Askar itu*」と「*Anak kucing itu*」を意図的に狙って行った動作ではないことを表わしている。それにもかかわらず、受身文の被動者が動作主の一方的な動作から何らかの影響を受けることが表わされている。

(6)・(7)……「弟がコーヒーを飲む」と「アマットが足を蹴る」という動作はもともと「私」に向けて行われた動作ではない。しかし、動作主の動作により「私のコーヒーがなくなった」や「私の足が痛くなる」という「私」にとってマイナスの影響をもたらされる。すなわち、動作の対象が「私」の体の一部や持ち物であるため、「私」にまで影響が及んだと考えられる。日本語の間接受身では受身文の主語に被害の意が生じるが、これらの例文で持ち主である「私」にマイナスの影響が生じる。

(8)・(9)……これらの文は(6)・(7)と構文的に類似しているが、被動者である持ち主が明記されていない。*ter*-構文が用いられるのは動作主の非意図的な動作に誰かが影響を受けることを表わすためである。この場合、動作主が手紙を燃やしたり、資料を捨てたりすることによって、迷惑を受けるのは手紙や資料の持ち主であるため、これらの例文には明記されていない被動者(=持ち主)の存在が想定される。

(10)・(11)……能動文では動作主がはっきりある動作を行うことを表わすが、受身文ではその動作により被動者(=動作主)が「けがをした」もしくは「死ぬかもしれない」というマイナスの結果を被ることを表現している。すなわち、動作主が自分のはっきりした動作からマイナスの影響を受けることである。*ter*-構文は形の上では間接受身であるが、被害の意味を表わす機能を持っていることが特徴である。すなわち、*ter*-構文の主語には動作を直接受ける無生名詞がたつことが可能である。被害を感じるとる有生名詞の被動者も同時に文中に存在する。(10)・(11)の例では、被動者は動作主と同一人物である。

上の例文のすべてにおいて、能動文の動詞は他動詞であるが、*tidak sengaja*(わざとでない)をつけることによって無意志的になる。すなわち、動作主が意図的に被動者に向けて働きかけるものではないが、動作主の

たまたまの動作に被動者が巻き込まれて影響を受けてしまうことを表している。これらの *ter*-構文は被動者に被害の影響をもたらすことで、田中・館岡(1992)、山田(1996)などのいう「能動文においては被害の意が感じられないのに、受身文にすることによって新たに被害の意味がでる」と述べられているのと同じであるといえる。ただし、*ter*-構文と間接受身の違いも明らかになった。このことについては、第5節で詳しく論じる。

4. *ter*-構文と *ke*-*an* 構文の関連

以上から、*ter*-構文は単に受身としてではなく、被動者に何か影響をもたらすことが明らかになった。この特徴は *ke*-*an* 構文と類似しているが、なぜマレーシア語には被害の意味を表わすのに二つの表現があるのか、そしてこの二つの表現の違いは何かということを検討するために、以下の考察を行なう。*ter*-構文と *ke*-*an* 構文をマレーシア語の直接受身である *di*-構文⁴と比較し、それぞれの構文の意味的特徴を見出す。

まず、(12)aと(13)aは全く同じ構成要素を持つ *di*-構文と *ke*-*an* 構文で、(12)bと(13)bはそれぞれの受身文に対応する能動文である。

(12) a. *Saya ditinggal bas.*=私はバスにおいていかれた。

b. *Bas meninggalkan saya.*=バスが私をおいていった。

(13) a. *Saya ketinggalan bas.*=私はバスにおいていかれた。

b. *(Bas telah pergi) dan tidak sengaja meninggalkan saya.*

=(バスがもう行った)私をおいていってしまった。

(12)aは自分がバスの時間に間に合わなくて、遅れてしまったため、おいていかれたという状況を描いている。それに対して、(13)aの文は、自分が時刻どおりにバス停に行ったが、バスはもうすでに行ってしまった時に用いられる表現である。この二つの構文から、*di*-構文の場合被動者の不注意がその事態の成立を招いてしまったが、*ke*-*an* 構文の場合は状況が被動者に影響をもたらしたことを表している。すなわち、*di*-構文では表わされている事態に被動者の責任が問われるのに対して、*ke*-*an* 構文では被動者には責任がないととらえることができる。

(12)bと(13)bの能動文の動詞を見てみると、*di*-構文に対応するものが「*meninggalkan*(おいていく)」という他動詞であり、動作主の意志性を読み取ることができる。すなわち、*di*-構文の能動文は時間になっても「私」が来ないため、バスが意図的に「私」をおいていったことを表しており、動作主に意図があるといえる。一方、*ke*-*an* 構文の能動文は、「私」が来ることを知らずに先に行ってしまった状況を表現している。そ

して、「おいておく」という動作については、tidak sengajaをつけ加えることによって動作主の意志的な行動であることは否定され、動作主の意図性が感じられないと言うことができる。

次に di- 構文と ter- 構文の違いについて、構成要素の全く同じ(14)と(15)で比較する。a は di- 構文と ter- 構文で、b はそれぞれの受身文の能動文である。

(14) a. Buku harian Taro dibaca oleh ibunya.

= 太郎の日記はお母さんに読まれた。

b. Ibu membaca buku harian Taro.

= お母さんは太郎の日記を読んだ。

(15) a. Buku harian Taro terbaca oleh ibunya.

= 太郎の日記はお母さんに読まれてしまった。

b. Ibu tidak sengaja membaca buku harian Taro.

= 母はうっかり太郎の日記を読んでしまった。

(14)の di- 構文は、太郎自身が日記を隠さずに人に読まれるような状態にしておいたから事態が発生した場合に使用される。一方、ter- 構文で表わされる(15)では、太郎は日記を読まれないようにきちんと隠しておいたにもかかわらず、お母さんが偶然にそれを見つけて読んでしまったことを表わしている。(14)には太郎自身の不注意のニュアンスがあるが、(15)には太郎は事態に対する責任は感じられない。

(14)bの di- 構文の能動文は、お母さんは太郎の日記だということを知っていながらそれを読んだことを述べている。しかし、ter- 構文の能動文の場合は、お母さんが本の内容を知らずに読んだのだが、読み始めてからそれが太郎の日記であると気づいた場合に使用される。すなわち、di- 構文の能動文の場合は、母親が意図的に日記を読んだのであるが、ter- 構文の能動文にはお母さんが知らずに日記を読んだという後悔の意味が込められている。

両構文に対応する能動文には共に「membaca(読む)」という他動詞が用いられるが、ter- 構文の場合は「tidak sengaja(わざとでない)」が加えられ、動作主の意図は否定されている。

以上の比較対照を行なった結果、di- 構文、ke- -an 構文と ter- 構文の違いについては、表1のようにまとめることができる。

	di- 構文	ke- -an 構文	ter- 構文
動作主の意図性	○	?	×
被動者の責任	○	×	×

表1 di- 構文、ke- -an 構文、ter- 構文の特徴

ter- 構文と ke- -an 構文の共通点として、能動文における動作主の意図性と被動者の責任がある。動作主の意図性に関しては、動作主が被動者に意図的に働きかけるものではないことも分かった。動作主の行った動作は意図的に被動者を直接対象として向けられたものではないし、被動者はそれをコントロールすることもできない。たまたまの動作主の動作に、被動者が巻き込まれて影響を受けてしまうことを表している。また、事態の生起における責任は被動者にはないということも両構文の共通点であり、特徴である。

両構文には以上のような共通点があるが、完全に一致していないことは、以下の2点から知ることができる。

ke- -an 構文は、動詞だけではなく、名詞、形容詞からも作ることができるという特徴を持つ。これらの動詞・形容詞・名詞からは意志性を読み取ることができない。一方、ter- 構文は他動詞からしか作ることができない。意志性のある他動詞から作られるにもかかわらず、事態の生起は動作主の意図によるものではないと見なされる。

また、ter- 構文には ke- -an 構文では見られない「非意図性」の意味が加えられていることが分かった。ter- 構文では動作主の動作は被動者に意図的に行われたものではないのに対して、ke- -an 構文の場合は被動者と無関係に行われたものである。

以上の被害の意味を表わす特徴から、マレーシア語の ter- 構文・ke- -an 構文を日本語の受身と対比させると、ter- 構文と ke- -an 構文は、形態的・構文的には異なるが、意味的には間接受身との類似性が見られることが明らかになった。なお、ter- 構文には間接受身だけでなく、動作主の「非意図性」の意味もあることが分かった。

以下では、ter- 構文と間接受身とを比較し、両構文の構文的・意味的異同を考察する。さらに、日本語とマレーシア語における非意図性の意味を比較するために、ter- 構文と「てしまう」表現との対照を行う。

5. 日本語との比較

A. ter- 構文と間接受身との比較

日本語の間接受身とマレーシア語の ter- 構文・ke- -an 構文はともに意志性の低い「ナル的」表現、つまり結果に焦点を当てて表わす表現である。それに対して、間接受身と ter- 構文・ke- -an 構文に対応する能動文は動作を表わすものである。これらの構文には、意味上の類似性はあるが、形態面・構文面では相違点をいくつかあげることができる。

日本語の間接受身になる語基には他動詞と自動詞がある。これらの動詞は主語の内発的な動作・作用を表しているもので、動作主の意志性がうかがえるものである。これはいわゆる「能動詞」⁵と言われるものである。一方、マレーシア語の ter- 構文の述語動詞は他動詞からなる。しかしマレーシア語では、受身文は動詞自体ではなく、能動文全体の文脈から派生したと考えられる。例えば、ter- 構文は意志性のある他動詞から作られるが、能動文には「tidak sengaja(わざとでない)」という非意図性の意味が加えられ、動作主の意志性が否定され、結果的に被動者に影響をもたらすものであることが示される。すなわち、マレーシア語では動作主の非意図性が迷惑の影響をもたらしたと言える。このように意志の面において、日本語とマレーシア語の間接受身の動詞に違いが見られる。日本語の間接受身では動詞自体の意志性が大きく関わっているのに対して、マレーシア語の場合は動詞の意志性ではなく事態の意図性が重要な鍵になっている。

間接受身の主語は、常に有生名詞でなければならないという制約がある。それは間接受身で派生する被害の意味を感じとるのは有生名詞でなければならないからだと思われる。一方、マレーシア語の ter- 構文は、主語として用いることができるのは有生名詞の被動者だけでなく、被動者の持ち物や身体の部分などもある。日本語とマレーシア語のこのような違いは、「動作の被動者」と「出来事の被動者」を区別して考えることによってとらえることができる。「動作の被動者」とは「動作を直接受ける被動者」のことを、「出来事の被動者」は「文で表わされた出来事から影響を受け、被害を感じとる主体」のことを指している。

ter- 構文は「被動者+ter-述語動詞+oleh(動作主マーカー)+動作主」で表わされ、主語が有生名詞である場合、その主語は「動作の被動者」と同時に「出来事の被動者」である。無生名詞(持ち物+持ち主)が主語の場合、持ち物は「動作の被動者」で、そのものの持ち主が「出来事の被動者」である。このように、主語が有生名詞か無生名詞かで間接受身と ter- 構文は異なるが、影響を受ける「出来事の被動者」は必ず有生名詞であるのは両構文の共通点である。マレーシア語では、被動者の持ち物が動作を受ける場合、被動者も間接的に影響を受けると考えている。日本語でも被動者の持ち物や身体の一部が主語になることがあるが、その場合直接受身になるという点でマレーシア語と異なる。

動作主に関しては、間接受身も ter- 構文も、動作主は必ず文に表れる。しかも、間接受身の動作主は有生名詞もしくは動作性のある自然現象でなければならない。ter- 構文の動作主は有生名詞のみで oleh という動

作主マーカーのあとに現われるのが一般的である。しかし、マレーシア語は例文(10)・(11)のように、動作主=「出来事の被動者」であるという文も存在する。上にも述べたように、マレーシア語の ter- 構文では「出来事の被動者」は必ず主語に立つという制約がないからである。

以上の ter- 構文の構造をまとめてみると、次のようになる。動作の被動者が主語になるのは直接受身の特徴である。

主語	述語	例文
動作の被動者 (=出来事の被動者)	ter-述語動詞+oleh+動作主	(4)~(6)
動作の被動者 +出来事の被動者	ter-述語動詞+oleh+動作主	(7)~(12)
動作の被動者	ter-述語動詞+oleh+動作主 (=出来事の被動者)	(13)~(15)

表2 ter- 構文の構造

日本語の間接受身はももとの能動文では迷惑の意味を含まないが、受身の「~られる」によって迷惑の意味を顕在化する(山田1996)。それに対して、マレーシア語の ter- 接頭辞と ke- -an 共接辞も日本語の場合と同様の働きを持っている。同じ動詞を直接受身の di- 構文で表現する時は迷惑の意味は表面に現れてこないが、ter- 構文と ke- -an 構文で表現してはじめて迷惑の意味が現れる。つまり、もともと係わりのないものあるいは間接的なものが、ter- 構文や ke- -an 構文によって係わられ、迷惑の意味が顕在化する。日本語もマレーシア語も、迷惑の意味は受身の文法的意味によるものであると言える。

以上、間接受身との比較から、ter- 構文は直接受身と似た形式を持っているが、間接受身としての働きを持っているといえる。

B.ter- 構文と「てしまう」との比較

ter- 構文が「非意図性」の意味を持っていることはすでに述べた。両言語における「非意図性」の意味の対応性を見るために、次の比較を行う。

杉本(1992)では、「てしまう」の機能を「話し手にとってコントロール不可能⁶な事態が実現する」のように述べている。動詞に「てしまう」が接続すると、それ全体としては無意志的な動作になる。そして、「てしまう」と接続する動詞には自動詞が多い。なぜならば、自動詞には無意志動詞が多く、もともと話し手にとってコントロール不可能な場合が多いためである。そして、無意志的な動作に「てしまう」が接続すると「予想外」のことを表わすというモダリティの意味が生じると結論づけられた。意味的にはコントロールしなかったのにできなくて、望んでいた事態にならなかったということ

である。普通、望んでいない事態とは「よくない」事態が多いため、「てしまう」は典型的に「よくない」事態を表わすと述べられた。

寺村(1984)では、「～てしまう」は基本的に、行為、動作、出来事が完了したことを特に強調する表現であるが、そのことが起こって、もはや起きる前の状態に戻ることができない、という話し手の心理的意味も表わすことがあるという。この心理的意味には二つの場合がある—自分ではどうしようもないできごとの場合には悲しみを、自分のしたことならば後悔を—伴うのが普通である。また、「元の状態には戻れない、とりかえしが見つからない、という気持ちは、しばしば自分の意志で実現・非実現が可能なことなのに、意識よりはやく身体が動いた、というような状況の表現としても使われる」(p154)という。

マレーシア語の受身としての ter- 構文は能動文がすべて他動詞からしか作ることができないという制約がある。他動詞はコントロールすることが可能な動詞を表わすが、「tidak sengaja(わざとでない)」をつけることによって、無意志的動作を表わすことになる。日本語の場合、動作自体は主体にとってコントロール可能で、しかも話し手と主体が一致する場合の「てしまう」構文がある。この場合、動作はコントロール可能のものであるが、意図的に行われた行為ではないため、コントロール不可能とみなされるという杉本(1992)の見解がある。すなわち、「てしまう」も他動詞から作られるものがあるということになる。そして、「てしまう」と ter- 構文の対応性が見られるのは、能動文が他動詞から作られる文で非意図性の意味を表わす場合のみである。

「てしまう」と接続する動詞には無意志動詞の自動詞が多い。無意志的な動作に「てしまう」が接続すると、意味的にはコントロールしたかったのにできなくて、望んでいた事態にならなかったということを表す。普通、望んでいない事態とは「よくない」事態であるため、「てしまう」は「不都合」、「反期待」の事態を表わす表現であると言える。マレーシア語では、コントロール可能な他動詞に ter- 構文をつけて無意志的動作を表わすことになる。「てしまう」と ter- 構文を作る動詞には違いがあるものの、両構文はともにコントロールしたかったのにできなくて、望んでいない事態が発生することを表わしている。そして、その事態は被動者にとって「不都合」、「反期待」の事態を表わす。

杉本は例外として、「私は思わず外に飛び出してしまった。(杉本 1992, p68(22))」をあげ、意図的に行われたわけではないが、「てしまう」には「不都合」や「反期待」というモダリティ意味がない場合があると述べられている。マレーシア語でも ter- 構文は他動詞から作

るが、すべての他動詞が ter- 接頭辞と連結してコントロール不可能で、「不都合」の意味を表わすとは限らない。たとえば、「Dia terhancur batu besar itu. 彼はその大きい石を砕くことができた。」は「可能」と「完了」の意味を表わし、「不都合」の意味はない。両言語の共通点として「てしまう」も、ter- 構文も、モダリティ意味は動詞の意味や文脈、常識に依存する部分があると言える。

以上のように、「てしまう」と ter- 構文には構文的な違いはあるが、意味的には類似していることが明らかになった。

6. まとめと今後の課題

マレーシア語における ter- 構文は日本語の間接受身に加え、「てしまう」によって表わされる非意図性の働きも持っていることが分かった。すなわち、受身としての ter- 構文は動作主の非意図的に行われた動作から、被動者が間接的に影響を受けるという意味構造を持っていると言える。そして、被動者には「不都合」か「反期待」の影響をもたらすということから、ter- 構文には被害の意味を表わす機能があると結論づけることができる。

ter- 構文は間接受身とは形態的・構文的には対応していない部分がある。例えば、ter- 構文は「動作の被動者」が主語に立つことから、直接受身の構文的特徴を持っている。しかし、意味的には被害の意味を表わす点で、間接受身と対応している。それは両言語の文法構造の違いによるものであると考えられる。すなわち、日本語の間接受身は動詞と構文の特徴から被害の意味を表しているが、マレーシア語の迷惑の意味は動詞と接辞(この場合は ter- 接頭辞)によって表わされるということができる。

また、被害の意味を表わす場合と中立の意味を表わす場合とで異なる構文が用いられる点では、両言語に共通した発想があると言える。このことについて、松岡(1995)の「インドネシア語にも間接受身的文(ter-, ke- -an 動詞文)もあるので、双方の言語に同じような発想のレベルで解釈できる受動態文も存在することは事実である。(p102)」という主張と一致している。

ke- -an 構文と ter- 構文は同じ意味を表わすものであることは Soenjono Dardjowidjojo(1983a)で述べられた。すなわち、ter- 構文と ke- -an 構文とはどちらか一方だけの接辞で作られた動詞があれば、もう一方のものはないと考えられる。しかし、以下の例は実際にマレーシア語に存在している。

(16) Budak itu ketinggalan bas.

あの子はバスに置いていかれた。

(16) Budak itu tertinggal oleh bas.

あの子はバスに置いていかれてしまった。

(16)と(16)の例ではke- -an構文もter-構文も主語が被害を被ることを表している。このように、ke- -an構文でもter-構文でも同じ意味を表わす動詞は6つある(terbakar-kebakaran 燃やす, terdengar-kedengaran 聞く, terlihat-kelihatan 見る, teracun-keracunan 毒にあたる, tertidur-ketiduran 寝る)。なぜこのような同義で同じ働きをする動詞が共存しているのかについては、今後の課題として考えていきたい。

【注】

- マレーシア語に関する新しい言語理論による研究はまだ充分に行われていない。一方、マレーシア語と同じ「ムラユ」語の変種であるインドネシア語の方は研究が進んでいる。インドネシア語はマレーシア語と文法構造がほぼ同じであるため、本研究ではインドネシア語の研究を参考にすることにした。
- Soenjono Dardjowidjojo(1983b)による定義では、ke- -an構文で表現されている事態は、(i) 思いがけない、あるいは予言し得ない、(ii) 及ぼす影響は迷惑(adversative)である。(森村 1992, p29)
- John V.Wolff, et al (1987)では、ter-構文とke- -an構文が同義であることを次の例を用いて説明している。
 - Mapnya ketinggalan(tertinggal) di rumah.
彼のファイルは家に置かれてきた。
 - Dia ketiduran (tertidur) di kursi besar.
彼はその大きい椅子で寝てしまった。
- di-構文は被動者に焦点を当てた表現で、本質的には能動文と同じ意味を表わしている。di-構文は日本語の「直接受身」と類似しているものである。
- 三上(1953)は受け身になるかならないかで動詞を二分して「能動詞」と「所動詞」と呼んだ。受け身になるものが「能動詞」で、「読む、書く、しかる」など、いわゆる他動詞のほかに、「死ぬ、(雨が)降る、跳び付く」などいわゆる自動詞の一部も含まれる。
- ここで言う「コントロール不可能」なのは、話し手にとってであり、その動作の主体とは無関係である。しかし、動作自体は主体にとってコントロール可能で、しかも話し手と主体が一致する文でも「てしまう」で表現することがある。この場合、話し手が意図的に行われた行為ではないため、コントロール不可能とみなされる。また、自然現象は、いかなる話

し手にとってもコントロール不可能な現象である。

【参考文献】

- John V.Wolff, et al.(1987) *Beginning Indonesian Through Self Instruction Book 3*. Jakarta: Gramedia Book Publishing Division.
- Kanou, Chieko.(1982) 'A Contrastive Study of "Voice" System in Japanese and Bahasa Malaysia.' *A thesis submitted in Partial Fulfillment of the Requirement for the Degree of Master of International Affairs*. The University of Tsukuba.
- Leow, Yoon Chin(1999)「日本語とマレーシア語の対照研究—迷惑の受身を中心に—」 広島大学大学院修士論文
- Leow, Yoon Chin(2000)「迷惑の受身に関する一考察—マレーシア語との対照を通して—」『日本語教育』 104 pp.40-49
- Lufti Abas.(1988) *Nahu Penambah Bahasa Malaysia*. Petaling Jaya: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd.
- ルシアナワティ(1998)「インドネシア語における種々の受身構文について—日本語とインドネシア語の対照研究—」『STUDIUM』 pp.91-109
- 松岡邦夫(1990)『インドネシア語文法研究』 大学書林
- 松岡邦夫(1995)「インドネシア語の従来の受動態とその問題点」『インドネシア言語と文化』 1 pp.97-104
- 三上章(1953)『現代語法序説』 刀江書房 復刊 1972 ころしお出版
- 森村蕃(1992)「インドネシア語に見られる間接受動的表現」『大阪外国語大学論集』 8 pp.19-30
- Soenjono Dardjowidjojo.(1978) *Sentence Patterns of Indonesian*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Soenjono Dardjowidjojo.(1983a) 'Beberapa Masalah Dalam Teori Morfologi Jeneratif: Satu Kasus Dalam Pembentukan Katakerja.' *Beberapa Aspek Linguistik Indonesia*. Jakarta: Penerbit Djambatan. pp.246-317
- Soenjono Dardjowidjojo.(1983b)'Struktur Semantik Dari Katakerja KE-AN.' *Beberapa Aspek Linguistik Indonesia*. Jakarta: Penerbit Djambatan. pp.110-143
- 杉本武(1991)「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』 4 pp.109-126
- 杉本武(1992)「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』 5 pp.61-73
- 田中真理・舘岡洋子(1992)「構文と意味の面から見た

『受身』と『~てもらう』の使い分け—『迷惑・被害の受身』の考察を通して』『ICU日本語教育研究センター紀要』2 pp.235-255

寺村秀夫(1984)「日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻」くろしお出版

山田勝弥(1996)「いわゆる迷惑受動文」『南山日本語教育』3 pp.150-173

湯浅章子(2000)「日本語, インドネシア語対照に基づく受動態に関する一考察—「第三者の受け身」は有標か—」『KLS』20 pp.12-22

【例文出典】

AHM=Abdul Hamid Mahmood.(1992) Ayat Pasif Bahasa Melayu. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan

Pustaka./ HM=Hashim Musa.(1979) 'Penghuraian Imbuhan bagi Kata Kerja Bahasa Malaysia: Satu Pendekatan Pengajaran.' Dewan Bahasa 23-1. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka./ KC =Kanou, Chieko.(1982) 'A Contrastive Study of "Voice" System in Japanese and Bahasa Malaysia.' A thesis submitted in Partial Fulfillment of the Requirement for the Degree of Master of International Affairs. The University of Tsukuba./ LA=Lufti Abas.(1988) Nahu Penambah Bahasa Malaysia. Petaling Jaya: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd./ SD=Soenjono Dardjowidjojo.(1978) Sentence Patterns of Indonesian. Honolulu: University of Hawaii Press.

(指導教官 多和田眞一郎)